



「このお菓子どーそ。今日も健太をよろしくー」

母がお茶を置いてドアを閉めたなら、とたんに机に突っ伏す家庭強制の先生。

大学二年生のそこそこイケメン、立派な雄っぱいを持つ競泳選手。

男前の顔を歪めて呻くのは俺がテーブルの下でいたずらしているから。
「く、こんなこと・・・！」と睨むのに「べつに俺は、ばれてもかまいませんけど？」と先っぽを爪でぐりぐり。

「先生に触るよう強要されたって泣きますし。」

大人受けするいい子ちゃんの俺と、昔、不良だった先生、どっちの言葉を周りは信じますかね」

「あ、く、くそお、んん！」とズボンがぐつしより濡れたにいったよう。

息を切らしつつ「この、性悪の、糞餓鬼・・・」と悪態を漏らしたのを聞き逃さず。

椅子から突き落とし「躰が足りてないね」と仰向けにして「シャツをめぐり、ご自慢の胸筋を露わに。

揉みしだいて乳首を爪でいじめて吸ってしゃぶいて噛んでやれば、あられもなく悩ましく悶えるばかり。

階下の母に聞こえないよう必死に声を殺しているのが、惨めでかわい

らしく、鼻で笑ってから尻の奥に指をイン。

乳首を指で恥じまくって「ねえ、鳴いてよ？」とくすくすと指でかき乱すも頑固。

舌打ちしたそのとき、階下から「ちよっとコンビ二行ってくるねー」と母の声が。

玄関の扉が閉まる音を聞いたなら、乳首をつねって引っぱり、三本の指をねじこみドリルのようにぐじゅぐちゅ。

「やあ、は、放してえ！くう、うふあ、そんな、広げちゃ、やらああ！」

「おふうう！」とメスイキして、ぐったり床にうつ伏せに。

「先生の鳴き声、かわい」とくすくす囁き「もっと聞かせて」と脱力する体を抱えて窓にもたれさせる。

窓にしがみつくようにし、突きだした尻に、痙攣しまくりの息子を食らわして腰を強打。声を抑えず、突かれるびたにあんあん窓に額を当てるさまを見てせせら笑い、囁く。

「母さん、コンビニ帰り、必ずこの窓見上げるんだよ」

びくりとして窓から放れようとしたのを、もちろん許さず、腰の強打を畳みかけ高笑い。

「お、願あ！やめて、くだ、しゃああ！も、もお、口ごたえ、しなあ、からああ！」

「いい子だ！」と注ぎこむと「んくううう！」と泣き叫び、ずるずると窓に張りつきながら倒れたもので。

床に丸まって泣きじやくる先生を見下ろし、ため息。

被害者面をしているが、先にキスをしてきたのは先生。

彼女がいるくせに。

「彼女と別れるまでやめないから」と思いつつ、なにごともしなかったように「せんせ、数学のつづきしよ！」と座って笑いかけた。

